

ミクロ経済学 1

第1回 導入 第1章 ミクロ経済学の論理と方法

1.1 経済学とは何か(1)

- 経済学の定義
 - 資源配分の問題を解決する
 - 稀少な財・資源を、競合する目的のために選択、配分する仕方を研究する学問
- 財とサービス(下線部1)
 - 狭義の財(goods): 効用(快適さ)を与える物理的なもの
 - サービス: 効用(快適さ)を与える非物理的なもの
 - 財とサービスを区別せず広義の財(goods)と呼ぼう
- 資源(下線部2)
 - 財を生み出すために必要な投入物 = 生産要素
 - 財である場合もあるし、そうでない土地などの自然資源の場合もある

2

1.1 経済学とは何か(2)

- 稀少性(下線部3)
 - 相対的な意味
 - 欲望を満たす量に比べて少ないということ
 - 稀少な財を経済財と呼ぶ
 - そうでない財は自由財
- 選択(下線部4)
 - 競合する目的にどれだけ財を割り当てるか
 - 個人の欲望の充足, 社会的な「効率性」などの観点から

3

1.1 経済学とは何か(3)

- 先ほどのロビンズの定義を裏から考えてみよう
 - 財・資源が(欲求充足に対して)稀少でなければ
 - 「各人は必要なだけ分配される」(マルクスによる共産制社会の定義)
 - 競合する目的がなかったら
 - つまり多様な欲望がなく, 多数の自律した経済主体があるから競合する
 - そうでなければ, 単一目的に従って単純計算すればよい. => 技術的な問題で経済的な問題ではない

4

1.1 経済学とは何か(4)

- ミクロ経済学の仮定
 - 「他の事情を一定として(ceteris paribus)」考える
 - 分析対象以外の事情を固定して考える
 - 合理的行動の仮定
 - 目的それ自身の内容には立ち入らない
 - なんら価値判断を含まないことに注意
 - なんからの明確な目的を, 制約条件に従いつつ, 最適に達成する行動

5

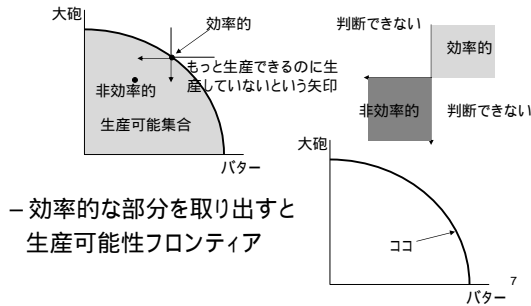
1.2 経済学の方法(1)

- 経済学における希少性をめぐる3つの問題
 - 生産技術選択の問題
 - どのように生産するか?
 - 資源の生産への配分の問題
 - どの資源をどの財の生産にどれだけ配分するか?
 - 分配の問題
 - 生産物をだれにどれだけ分配するか?

6

1.2 経済学の方法(2) 生産技術選択の問題

- 生産可能性フロンティア(2財しか考えない)



1.2 経済学の方法(3) 3つの問題

- シグナルとしての価格
 - 様々な嗜好を持ち自律した消費者の存在を出発点する
 - 生産者, 消費者の情報, 商品に関する情報をもし一極で集中処理できるなら, 消費者の嗜好を満足させることができるだろう. 最適な資源配分
 - そのような能力を仮定するのは現実的ではない.
 - 分散の情報と情報交換機能としての価格
 - これによって各主体が自律的に決定する
 - その結果として, 比較的最適な資源配分を実現している.

8

1.2 経済学の方法(4) 3つの問題

- 一般均衡理論
 - ミクロ経済学の究極目的
 - 社会全体のすべての財の生産・消費を同時決定する論理の解明
 - 財相互の相互関係を解明する
 - そのためには個々の財の消費, 生産のそれぞれの局面がどう決まるかを解明する必要がある.
 - 部分均衡理論も必要
 - まずここから始める

9

1.2 経済学の方法(5)

- 合成の誤謬
 - 個別で正しいことを集めても全体に関して当てはまるとは限らない.
- 公正の問題(所得分配の問題)
 - 稀少な財・資源を, 競合する目的のために選択・分配する結果として, 資源配分だけでなく所得分配も決まる.
 - 資源配分の効率性と所得分配の公正性の関係
 - 公正性に関するもっともらしい基準とは?
 - 社会全体に妥当な選択基準は?

10

1.3 市場経済の効率性(1)

- 価格メカニズムによる調整
 - 資源配分, 所得分配が決まる
 - 価格の果たす役割
 - それが必要な理由

11

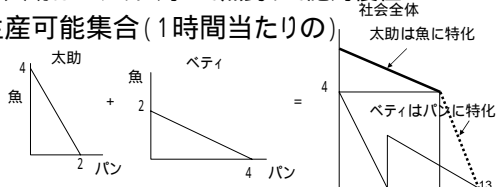
1.3 市場経済の効率性(2)

- 分業・絶対優位・比較優位
 - 特化
 - 特定の財の生産, あるいは, 特定の生産プロセスに専門化すること
 - 分業
 - 各人が得意な分野に特化して生産活動を行う.
 - なぜ特化と分業がよいのか
 - 比較優位を活かす(絶対優位を活かすのではなく)
 - 次スライド参照

12

絶対優位

- 社会の生産能力
 - 太助 パン2個/時間 魚釣り4匹/時間
 - ベティ パン4個/時間 魚釣り2匹/時間
 - 太助はベティに対して魚釣りで絶対優位
- 生産可能集合(1時間当たりの)



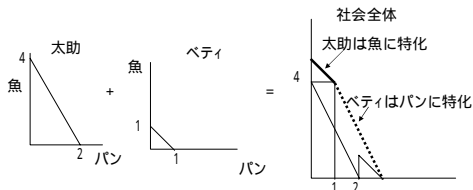
比較優位(1)

- 社会の生産能力
 - 太助 パン2個/時間 魚釣り4匹/時間
 - ベティ パン1個/時間 魚釣り1匹/時間
 - 太助はベティに対してすべてで絶対優位
- 機会費用
 - パン1個作るために魚をいくつあきらめるか
 - 太助 2匹 ベティ 1匹
 - ベティがパンを作った方があきらめる魚の量は少なくすむ
- 比較優位
 - ベティはすべてで比較優位ではないが、パン作りでは比較優位
 - 比較優位は、機会費用が少ない方が持つ。
- 分業は絶対優位では決まらず比較優位で決まる

14

比較優位(2)

- 生産可能集合による分析



15

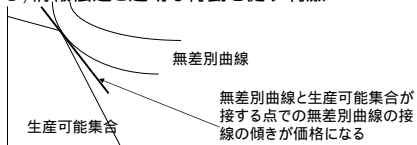
価格の役割(1)

- 価格は交換比率を表す
 - 効率的な生産では特化が行われることが分かった、どのように効率的な生産に導かれるのかの説明が必要 価格が誘因となる
 - いくつのパンと何匹の魚を交換するかを決める
 - これを見て太助とベティは生産量を決める。
 - 例
 - パンと魚が2:3で交換されているとしよう。
 - 太助にとってはパン1個を作るための機会費用は魚2匹
 - 自分でパンを作らずパンと魚を交換すればパン1個に対して魚は1.5匹
 - パン1個作る機会費用より市場でパン1個買ってくるための価格の方が安い。
 - 機会費用が高いため、パンを作ることは損。
 - 太助は魚取りに特化
 - ベティにとっては魚を1匹とる機会費用はパン1個だが、市場では魚1匹がパン2/3個になっている
 - ベティはパン焼きに特化

16



価格の役割(2)

- では価格はどうか決まるのか?
 - 第2章以降の消費理論で可
 - 大まかには、太助とベティのパンと魚に対する嗜好と、生産可能集合とのかねあい決まる。
 - 価格は(消費者の嗜好と他の生産者の生産技術に関する)情報伝達と適切な行動を促す刺激



17

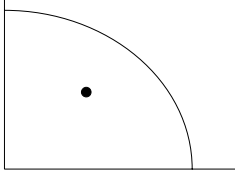
1.4 生産可能曲線による分析(1)

- 生産可能曲線 = 生産可能性フロンティアの形状
 - 2人の場合は  だったが、人数や生産主体が増える  となる
 - パンの生産量を増やせば増やすほどあきらめなければならぬ魚も増える
 - 社会的な機会費用の逡増

18

1.4 生産可能曲線による分析(2)

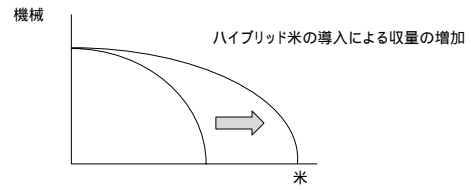
- 非効率的な生産
 - 生産可能性集合の内部で生産が行われる場合
 - なんらかの制約条件の存在
 - 非効率的な生産と不完全雇用



19

1.4 生産可能曲線による分析(3)

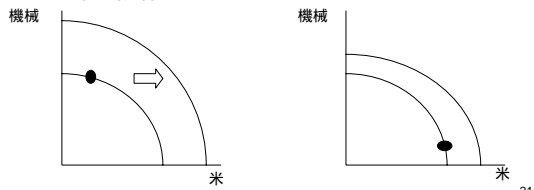
- 技術革新
 - 生産可能曲線の外側へのシフト



20

1.4 生産可能曲線による分析(4)

- 成長と消費
 - 成長は生産可能性曲線の外側へのシフト
 - 成長の仕方は、消費財と資本財生産の組み合わせ方に依存する。



21